

■教育行政のポイント

いま話題の“TOEFL”とは

菱村 幸彦

前回、国際バカロレアを取り上げたが、国際関係でもう一つ、いま話題となっている TOEFL (トーフ) を取り上げる。

非英語圏の英語力測定テスト

4月8日に自民党の教育再生実行本部は、海外で活躍できる人材の育成を目指した教育政策として、「TOEFL などの一定以上の成績を大学の受験・卒業要件にする」ことを安倍首相に提言した、というニュースが流れた。

続いて、5月28日に教育再生実行会議は、グローバル化に対応した教育環境づくりとして、①大学入試や卒業認定における TOEFL 等の外部検定試験の活用を進め、海外留学に結び付けること、②英語教員が TOEFL 等の外部検定試験において一定の成績 (TOEFL iBT 80 程度以上) を収めることを目指し、採用において TOEFL 等の活用を促進すること等を提言した。

TOEFL という言葉をご存じの方は多いと思うが、もう少し詳しくその内容をみてみよう。

TOEFL とは、Test of English as a Foreign Language の略称で、英語を母国語としない人々の英語運用能力を測るテストである。このテストは、アメリカの非営利団体である ETS (Educational Testing Service) が1964年に始めたもので、世界的に広く利用されている。日本では、国際教育交換協議会 (CIEE) 日本代表部が同テストの運営を行っている。

現在の TOEFL は、「読む」「聞く」「話す」「書く」の4技能を測定するインターネット版テスト (iBT = Internet-Based Test) を中心に実施されている。世界で毎年約100万人が TOEFL iBT を受験しており、テストセンターは、世界165カ国に約4,500カ所あ

る。日本にも約100カ所置かれている。

日本のスコアは最下位レベル

TOEFL は、アメリカ、イギリス、オーストラリア、ニュージーランド、カナダなど英語圏のほぼ全ての大学をはじめ、130カ国8,500以上の機関で、入学、奨学金、卒業などの基準として活用されている。わが国でも、TOEFL iBT のスコアをAO入試、外国人留学生入試、帰国子女入試等に利用している大学は、すでに219校に及んでいる。

日本の学生がアメリカなどの大学に入学を希望する場合、TOEFL の一定以上のスコアが要求される。要求されるスコアは、大学によって異なる。例えば、2014年度のフルブライト奨学金大学院プログラムでは、iBT で80ポイント以上が応募条件である。ハーバード・ビジネス・スクールやオックスフォード大学のビジネススクールなどでは、iBT 109ポイントを出願の最低要件としているという (iBT の満点は120ポイント)。

TOEFL の利用は、大学に限らない。わが国でもすでに29道府県・6指定都市の教育委員会において英語教員の採用試験で TOEFL の良好なスコアをとった応募者を優先採用するなどの措置をとっている。

ただ、残念なことに、わが国の TOEFL の成績はよくない。TOEFL iBT の国別ランキング (2010年) をみると、日本は163カ国中135位と最下位レベルにある。近隣諸国と比較しても、日本の平均得点 (70ポイント) は、韓国 (81)、中国 (77) に及ばない。

こうした状況を憂慮した教育再生実行会議は、小学校からの英語学習の拡充策をはじめ、様々な英語教育の改革を提言している。今後の英語教育改革の成り行きに注目したい。

(ひしむら・ゆきひこ= (財) 学習ソフトウェア情報研究センター理事長)

●校長のメッセージが築く学校と家庭・地域の信頼関係

『「校長のあいさつ」12カ月——心が届く77文例』

【編集】露木昌仙 (全国連合小学校長会会長) A5判・172頁 / 定価2,310円

■研修誌・図書の小社への直接のお申込みは、無料FAX 0120-462-488 をご利用ください (24時間受付・即日発送)